復讐者の仲間のような感じの人

仮名ライター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐者の仲間のような感じの人

【Ｎコード】
Ｎ８８６０Ｚ

【作者名】
仮名ライター

【あらすじ】
原作のクルタ族が虐殺される前にクルタ族の１人に転生したオリ主がある目的のため何とか生き延びようと些細な努力をし、クラピカと共に出来ることをしながら原作に介入する物語

イチ話

俺は思考する
何だろうね俺はもし他の人に話したら、頭がイカれてるって言われるから絶対に内緒にしてる事がある
何と前世の記憶がある、しかも結構鮮明にあるのだ、少々ぼやけている箇所もあるが、支障はないだろうと思う
俺は生まれ変わりを経験したのである、
しかし内心はしゃぎまくったね、想像して欲しいまさしく頭脳は大人体は子供を体現してるのだ
色々妄想するだけで楽しい、赤ちゃんの頃はその妄想だけですごしたぐらいだし
よく笑う赤ちゃんではなく、ニヤニヤしてる気持ち悪い赤ちゃんだったと育ての親は言ってる
ここで疑問に思うが俺には親はいない、一応いたけど自分を産む時にかなり衰弱してお亡くなりになったらしい
父親はそれが精神的にショックを受け後を追うように病気でお亡くなりになった、何と脆いお方だ
接する機会が少なかったからあまり悲しくはなかった
そんな悲劇の過去を振り返るより、薄情かもしれんが将来の輝かしい未来の方が最優先事項なのだ

だが輝かしい未来を想像して喜んでいられるのもつかの間だった
俺は生まれ変わってからこの世界に色々疑問を持ち始めた、周りの人間のおかしい発言がおかしいのだ
魔獣が出たやら色々だ、前世に魔獣なんて存在しないし聞いた事ない、もしや前世でそういう魔獣がいたとしても秘匿されてたとか？
　と考えていたが
これが俺にとってこの世界が別の物だと何となく気付かせる、聞き

捨てならない言葉を聞いたのだ、世界とかもはやどうでもよくなる代物

ーーー【クルタ族】俺の住む村の民族の名前
ーーーそして隣に住んでる夫婦の子供の名前が【クラピカ】

いやいやさすがに生まれ変わったりするような非現実的な事を経験した俺だが
そんなクソったれな事ないだろ偶然だよ偶然だってそれはないって否定ともしやまさか？ってな感じで混乱しまくっていた
確定ではない、情報が足りないしそんな訳ないと否定しまくっていたが

ところがどっこい　現実は非情なのだ

成長するにつれ脳みそに叩きこまれるこの世界の常識、文字、文化酷似してるで済ませられないレベルじゃない、それならどれだけ良かったか
組み上がったピースが嫌でも想像したくない物に出来上がる
そう俺の前世とは異なる世界、だが知っているのだこの世界を事を

少年ジャンプの俺が最も好きな作品【H×H】の世界

有り得ないと否定したいが、見に起きた現実を受け入れるのは時間かかったが
受け入れない現実逃避するのは愚か者のする事だ、多少諦めな感情もあったかもしれないがそれはそれだ
認識したらもう嫌になってくる自分の生まれ変わった環境に
【クルタ族】である俺の死亡フラグを回避せねばならないのだ

―――開幕―――

―――

―――

何だかんだで今現在８歳
原作知識のある俺だが今の所出来る事は少ない
クルタ族を皆殺しにする【幻影旅団】に抵抗出来る策を何もしていないのだ
このまま行けば数年後に起きる、クラピカ君以外のクルタ族目玉抉られ皆殺し事件が発生する
案はあるが実行するのは不可能

１　クルタ族の皆に数年後に幻影旅団って言うイカれてる連中がやって来るから逃げようぜ！作戦
子供の戯言と言われまず誰も信じてくれない、仮に信じてくれたとしてもどこに逃げるって話しだ、原作知っている俺だからわかる
幻影旅団はどこに居ようと追って来る恐ろしい連中のため不可能

２　俺だけあらかじめ逃げようぜ！作戦
俺達クルタ族の集落はかなりの山の奥地で、森や山に囲まれた言うならば秘境の地に住んでいるのだ
別の街に行く道は大人しか知らないので集落から出ても野垂れ死んで、魔獣のご飯になるのが落ちだ
いざという時はありかもしれん、体を鍛え街までの行き方を知ったら決行可能もありだが現在は不可能

３　Ｈ×Ｈの世界の異能【念】を覚え返り討ちにしようぜ！作戦
これは念使いにならなければならない、あの幻影旅団のウボォーがなかり強かったと言ったぐらいだ

念は間違いなく知ってるどころか会得してるだろう、念能力者には念能力しか対象出来ないはずだし
だが無理だった大人に遠まわしに念教えてくれと言ったら
なぜ念を知っているかのかはさておき今の俺（８歳）には教えるのは早すぎる、いずれ心身共に成長したら教えるから我慢しろ、だとさ
諦めきれずに泣きついたけど、怒鳴られ却下されてそれ以来念の事を聞いても無視されるしまつ、覚えたしても追い返すのはまず無理か、よってこの案も不可能

４　クルタ族唯一の生き残りクラピカにくっ付いて一緒に生き残ろうぜ！作戦
これが下手したら生き残る確率が案２より高いかもしれない
ただ原作知識のある俺でも、原作５年前とだけ書かれてただけで明確に書かれていないため不安が多い
それに今クラピカ君俺と同じ８歳原作では確か１７歳、幻影旅団に村を襲われたのは１２歳ぐらいの計算だ
この案を実行するなら、クラピカ君が１２歳になったら四六時中張り付いていなければならない、しかしこれではまるでストーカーだ
生き残るためならしょうがないけど

結論を出すのは早計だが、案４が一番生き延びる可能性が高い
ふーむ、そうなら実行するにしてもクラピカが１２歳になるまで時間があるし今出来る事とは何だろう？
１　肉体の強化（現在進行形）
２　念をどうにかして習う（今のところ無理）
３　生き延びたその後の事を考える
４　案３のため少しでも外の知識＆生きるための知識
５　死亡フラグ回避作戦案４のためにクラピカ君に好印象を与え、ストーカー行為しても気にされないぐらい仲良くなる（現在進行形）

取り敢えずこれぐらいかな、全ての案は直ぐに解決出来る物じゃないな４年の期間で出来る事をしよう
念は覚えるのは俺の中では確定事項だ、理由は簡単念使いになりたいからだ！
死亡フラグ回避も大事だが原作ファンとしてはこれは捨て置けんのだ！
今は無理だがその下地作りの肉体強化は必須だな、この世界はアホな感じに人間の限界値がおかしい
前世では人間がどんなに頑張っても越えれないラインを努力次第で余裕でぶっちぎる
才能や環境によって違うかも知れないが、原作のクラピカ君は初期の頃から身体能力はそれなりに高い
同族である俺のポテンシャルもそう悪くないはずだ、少し前から鍛えてはいるがよりいっそ取り組もう
知識は勉強あるのみ、これはあまり得意ではないがやれる事はやっておくべきだな

ー最後のクラピカ君と仲良くなるか、これが一番ミスったらヤバいかも……

「クラピカくぅぅぅん！　あ　そ　ぼ　！」

窓から少年がひょっこりと顔を出す

「うん、今行くから待って」

今俺が声をかけたのはショタっ子クラピカ君だ
原作の絵では女に見間違うくらいの中性的な顔してる、実際今でも男と知らなかったら女と思えるぐらいだし

「お待たせ、今日はどうするの？」
「とりあえず広場にいこうぜ、どうせ皆いるだろ」
「うん」

クラピカ君がコクリと頷き俺の後を付いて来る
意外な事に今のクラピカ君は原作のようなクールな感じではない、
大人しく素直でいい子だ
やはり目玉抉られ皆殺し事件以降、一人で生きて行くためにあんな
感じになったのだろうか
原作でもクラピカがゴン達に出会うまでの経歴は明かされてないしな
歩きながら子供らしい会話をしながら村の広場に付いた
広場には年齢様々な子供が数人いる、俺とクラピカ君は同じ年齢だ
が俺の方が早く生まれたからお兄さんだ

広場で何時のように自分とクラピカ君含む子供達としょうもない遊
びをして遊んでいる、精神年齢が幼子ではないからガキの遊びなぞ
つまんないが、クラピカ君ストーカー計画には必須なんだからしょ
うがない
そんな事を考えていたら誰かにクイッと袖を引っ張られた

「どうしたの？」

いつの間にか俺のそばにいたクラピカ君が、首を傾げて俺を真っ直
ぐに見つめてくる
何てあどけない顔してやがるんだ、これが数年後復讐のためなら死
んでもいいとか言い出す青年になるんだから、もうゾッとするね

「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなって考えてただけ」
「そう……」

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」
「うん」
先生とはクルタ族の教育係みたいな人だ、山奥に住んでる民族とは思えない程教育水準は高い、数学、H×H世界の歴史やその他諸々原作のクラピカの博識っぷりが納得するぐらい濃い事まで習わされる、詰め込み教育ってレベルじゃねーぞって感じだ
だからこそ少数民族なのかもしれないな、クルタ族は1人1人の人間がかなり優秀で知能と身体能力が高い、これを先祖代々受け継がせて行くなら少人数の方が効率がいい
山奥に住む自分達の民族だけの文化で完結せず、他国多方面の知識を持ちながら、それでも極力クルタ族以外の者と関わらない
頭がいいからこそ理解してるんだろう、自分達の持つ特殊な瞳【緋の目】の希少価値を、世の中にいるゲス地味た収集家が居る事にだからこそこうやって隠れるように住んでるんだろうな、ぶっちゃけ隠れるなら街にクルタ族って事隠して住んだ方がいいと思うけどねまぁ無理だろうね、民族のプライドが邪魔してそんな事しないだろう

「ねぇ、聞いてる？」
「あーすまん聞いてなかった、何？」
「今日から勉強の後に体術を教えるって先生言ってたけど、何をするのかなって」
「そう言えばそんな事言ってたな、うーん体術って何するんだろうな、殴り合いとかか？」
「殴り合いってちょっと怖いね……」
「心配すんなって冗談だから、いきなりそんな事させられないだろ」
「……うん」
ゴクリ……これ本当に原作クラピカみたいになるのか？　仲良くなろうぜ作戦決行してきてもう結構たつが、復讐とかそんな概念から

程遠い性格してんぞ

その後先生による地獄の勉強会で頭を酷使し、慣れない対術の稽古で体中悲鳴をあげている俺、尋常じゃないぐらいスパルタだ
別に俺が特別に貧弱という訳ではない、早朝から肉体強化のために色々やってるせいで疲れがドッときたのだ

「大丈夫？」
「平気だって」

心配してくれるのはクラピカ君だけだ、他の糞ガキ共はさっさと家に帰りやがった
しかしクラピカ君はいい子だ、これで女の子なら完璧なのに

「どうしたの、ジッと僕の事見て？」
「何でもない、それより家に帰ろうぜ」
「うん、でもちょっと待って、はいこれ」

クラピカ君が俺にくれたのは、何かドロドロした緑色した固形物が入った木を丸く加工した小さなコンパクトだった

「これ何？」
「前に父さんと出掛けた時に取って来た薬草を潰して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付けるといいって父さん言ってた」
「くれるのか？」
「うん、使って」

なんと……優しい子だ、俺が女なら惚れとるぞ

「おお、ありがとう、大事に使わせてもらうぞ」

「なくなったら言って、まだ家にあるから」
「おう」
家に付くまで、クラピカ君と今日習った事をお互いに話し合う
歴史や別の国の文化に人一倍興味のあるようで、楽しそうな顔して
俺に明日はどんな事勉強するんだろう、と語ってくる

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」
「うん、まだ明日ねアルベル」

別れを告げ、クラピカ君は家に入って行った
アルベルこと俺もお世話になってる育ての親の家に入る

「ただいま」

お帰りなさいと返ってくる育ての親のおばさんの声を聞き、どこか
不安な気分になる
おばさんが作ってくれた夕食を一緒に食べながら、今日どんな事勉
強した今日何があったかを話す、おばさんは微笑みながらそれを聞
いてくれた
自分の部屋に戻る

吐き気がする
俺はゲスだ
おばさんは死ぬ
幻影旅団に殺される

俺が必死に頭を下げ原作知識をおばさん喋ったらもしかて避けられ
るかもしれない

だが俺はそれをしない、諦めているから
おばさんの命も先生の命も子供達の命も、クルタ族の命全てを
達観してるとか悟ってるとかそんなんじゃない、あきらめの感情の
先に俺の中に生まれた物は

めんどくさい

俺は凡人だ、自分の事を考えるだけで精一杯なんだ
他人の命を救うとか無理、どうするとか考えるのもめんどくさい
自分が助かればそれでいい

手に持った手帳、忘れてしまわないように原作知識を日本語で書き
続った物を何度も読み返す、読み返したところで無駄なのはわかっ
てるんだけどね……
手帳を部屋に置かれた棚にしまう、隠す必要はないどうせ見つかっ
ても俺以外の人間は読めないし、盗られたとしても写しがまだ何冊
かある

「……ゲロ吐きそう」

そう呟き、俺は布団に寝転んで目を瞑り考えるのを放棄した

──クラピカ──
──
──

「クラピカくぅぅぅん！　あ　そ　ぼ　！」

もうそんな時間だったんだ、僕は慌てて窓から顔を出して外にいる

アルベルに向かって言う
「うん、今行くから待って」
鞄を手に取り、早足で自分の部屋から出る、朝食の後片付けしている母さんに向かって声をかけた
「アルベルが来たから行ってくるよ」
「ええ、行ってらっしゃい」
「うん、行ってきます」
扉を開けたら僕を待っててくれてるアルベルがどこか不自然な笑顔をさせて立っている
いつもアルベルはこんな感じだ、ちょっと前にその事を言ったら「そうか？」と不思議そうに悩んでいた
普段見せないアルベルの困った顔を思い出すでだけで笑っちゃいそうになる
僕は笑いそうになるのをこらえた、いけないいけない待ってくれてたんだし
「お待たせ、今日はどうするの？」
「とりあえず広場にいこうぜ、どうせ皆いるだろ」
「うん」
基本僕はアルベルとしか遊ばない、広場の皆とも仲良くしてるけど誰が一番仲がいいと言われたらアルベルだって答えると思う
だってずっと一緒にいるから、僕が物心付いた頃からアルベルと二人で一緒にいる
それが普通何だと思ってるし今でもそう思ってる
広場に付くと皆と遊んでいると、いつの間にか皆の輪の中から外れ

考え事をしているのか1人佇んでいるアルベルがいた
アルベルに近寄り声をかけた

「アルベル？」

呼んでも反応しないからアルベルの袖を引っ張る
やっと気付いのかアルベルが僕の方を向きハッとした表情になった

「どうしたの？」
「何でもないよ、昼からどんな勉強すんのかなって考えてただけ」
「そう……」

嘘だね、アルベルがこういう顔してる時は変な事考えてる時だけだ、
ダテに僕とアルベルはずっと一緒にいるわけじゃない
何考えてたのって聞いても、はぐらかされるからもう聞かない事にしてる

「どうする、ちょっと速いけど先生のところに行くか？」
「うん」

僕は勉強が好きだ、先生の話しを聞いてるだけでワクワクする
ふとアルベルの方を見ると、相変わらず難しい顔しながら頭を捻ってる、アルベルは歴史があまり好きじゃないらしいこんなに面白いのに
授業も終え先生が昨日言ってた体術の時間になった
僕は体を動かすのも好きだけど、殴ったり殴られたりするのは好きじゃない

さっきアルベルがたいしたことないって、僕を安心させるために言ったのを思い出しちょっと気持ちが落ち着く

体術の時間が始まった、先生がアルベルを指名して基本の体の動かし方などを説明する
別に先生はアルベルをいじめようとしてる訳じゃない、アルベルは同年代や少し上の人より鍛えてる
朝早く起きて運動してるのをアルベルは皆には黙ってやってる事は知っているがバレバレだ
僕にも教えてくれないのはちょっとムカつく、体術を習う事だし今度から僕もアルベルに話して一緒にやろうと思う、断っても聞いてやらない僕に黙ってた罰だ

アルベルが先生やらみんなの実験台にされ結構ボロボロになってる
体術の時間も終わり、先生に挨拶して皆帰って行く
僕はアルベルが少しだけ心配になった

「大丈夫？」
「平気だって」

大丈夫って言ってるが体はそうは見えないあちこち痛そうに庇っている
またよからぬ事を考えてるんだろう、なぜか僕の事をジッと見てくる

「どうしたの、ジッと僕の事見て？」
「何でもない、それより家に帰ろうぜ」

そういえばアルベルに渡そうと思ってた物があるんだ

「うん、でもちょっと待って、はいこれ」

鞄から小さめの木製のコンパクトを取り出しアルベルに手渡した

「これ何？」
「前に父さんと出掛けた時に取って来た薬草を潰して塗り薬にした物だよ、痛い部分に付ける　といいって父さん言ってた」
「くれるのか？」
「うん、使って」
「おお、ありがとう、大事に使わせてもらうぞ」
「なくなったら言って、まだ家にあるから」
「おう、ありがとう」

普段素直じゃないアルベルが素直にお礼を言ってくれるから、何か恥ずかしい
家に帰る最中、歴史などの楽しさをアルベルにわかって貰うため多いに語った

「それじゃあ、また明日なクラピカ君」
「うん、まだ明日ねアルベル」

もっと話したかったけど残念、アルベルと別れ家に入る
やっぱりアルベルといる時が一番楽しい、明日はアルベルと何しよう？

変わらないたわいもない日常、母さん父さんアルベルやクルタ族の皆
こんな日がずっと続けばいいのに

イチ話（後書き）

クルタ族の設定は独自解釈や設定が入ってます
クラピカの性格は幻影旅団の虐殺やまだ年齢的なものを考え原作とは全く違う物になってますので違和感がありまくりです
原作クラピカファンの皆様申し訳ありません
後クラピカは男であってますよね？

に話

この世界に生まれ変わって数年頑張ってやっとこさ成果が出てきた
身体能力これはまずまずと言った所だろう、ガキのカテゴリーの中
では俺がトップクラスになってる、日々の積み重ねは大事だな早朝
トレーニングしててよかった
もう一つがクラピカ君ストーカー計画の案である、クラピカ君と仲
良くしようぜ作戦は驚く程うまくいってる
男の俺ですらびっくりするぐらい仲良くなった
早朝クラピカ君と一緒にトレーニング、終わったら一旦家に帰り朝
食をとる
その後クラピカ君と先生の所で勉強&体術、家の用事がなければク
ラピカ君と一緒に遊んだり、近くの森で冒険と言うなの脱出計画の
下見（街までの行方は未だに不明）
こんな感じのため四六時中一緒にいるのだ、最近はクラピカ君が俺
を誘いに来たりする、子供に懐かれて嬉しい気持ちもあるがどう考
えても行き過ぎな気がするでもない
このまま行けばストーカー作戦は大丈夫かもしれない、順調順調

ここ最近は先生の授業と平行に体術をクラピカの親父さんにも稽古
つけてもらっている、念は教えてくれないけどね
やはりクラピカ君のお父さんだけあってかなりのイケメンだ母親の
方も美形で、その両方の遺伝子が余す事なくクラピカ君に遺伝してる
うらやますぃ

クラピカの親父さんは俺基準だがかなり強い、子供の俺とクラピカ
君2人がかりで戦っても触れる事さえできない状態だ
近頃は素手の体術もそうだがクラピカ君の親父さんにはクルタ二刀
流と言う、クルタ族に伝わる少し短めの剣2本を使う剣技も存在し

てるため此方も習い始めた
これは曲者すぎる、１本でも剣を使う技術ってのは大変なのに２本共とも使いこなさなければならない、断言してもいい俺には向いてない
様になる程度にはやるつもりだがこれは限界が来るだろう、世の中には才能の壁があるのだよ現にクラピカ君は同じタイミングで習い始めた筈なのに俺より上手く２本の剣を使いこなしてる
いつも鍛錬が終わったらクラピカ君の親父さんはアドバイスしてくれる、性格もいい最高の親父さんだ鍛錬の最中は厳しいけどね
そんな感じで今を過ごしている、現在１０歳旅団がこの村に襲来するまでおよそ後２年
死亡フラグを回避して上手く生き残った後の事も考えねばならん、正直何も思いつきません
ガキ１人で生き抜ける程世の中ってのは甘くないだろうしね、身体能力は一般人を越えてる事は越えてるしいっそ強盗にでもなるか？
　子供強盗これは流行るかも……
無理か、まぁ死亡フラグを回避した後にでも考えるか…

はい今日は生憎と外は雨
部屋でボーっとしてたらクラピカ君が遊びに来た

「何してるの？」
「何もしてないぞ、暇で死にそう」
「ならいい物持ってきたよ」

そう言うとクラピカ君は鞄からゴツい本を数冊取り出した

「父さんが先月街で買って来た本を持って来たんだ、父さんが読み終わったから僕が貰ったんだ」

「太い、まるで鈍器だな人殺せるぞこれ」
「面白いよこれ、アルベルに貸してあげる」
「うーんありがとう、ところでこれは何の本？」
淡泊な表情から一転、クラピカ君が笑顔になる
嫌な予感

「聞きたい？」
「聞きたいかも……」

やべえ失敗した

「アイジエンの大陸にかつて存在し高い文明を持ちながら滅びたニジェヒャン族で使われてた文字やそこに生きてた人の生活を綴った、とても面白い内容だよ！」

テンション上がって来やがった、クラピカ君は意外とこういうところで熱くなる性格もある、仲良くなって数年たって知ったがこうなったら止まらない

「で凄いのがさ、この風習の１２歳になったらーーーーー」
「へぇそうすごいんねー」
「ちゃんと聞いてよ！　で続き何だけどこの文字を見る限りーーーーー」

くっ、これは長くなるぞ！

「僕はこの時対立してた民族との交流で疫病がーーーーー」

もう一時間は立ちましたが止まりません

「ーーーーでアルベルはどう思う？」
「え？　そ、そうだな大変だな」
急に話しを振るなよ、全然聞いてなかったぞ
「聞いてなかったでしょ？」
「聞いてませんでした、ごめんなさい」
「全くアルベルはしょうがないな……もう一度話すから聞いててよ特別だからね！」
「えっ……エェェ……」
さらに一時間追加された
流石にこれ以上長引いても拉致があかないんので真面目にクラピカ君の話しを聞いて、何とか有り難い歴史のお話しを終わらせる事に成功した
「ところで聞きたい事あるんだけどいいかな？」
「いいけど何？」
「なら聞くけど、アルベルは何で僕の事君付けで呼ぶの？　一緒に先生の授業聞いてるみんなには付けてないよね？」
あれそう言えば何でだろう？　他のガキ共は呼び捨て何だが
「ねぇ、何で？」
急に不機嫌になりやがった
「うーん何でだろう？　特に意識した訳じゃないんだけど」
「なら僕の事も呼び捨てでいいよ」

「え？」
「だから呼び捨てでいいってば」
なぜそこでムキになる、あれか友達なのに呼び捨てじゃないのが腹立つとかか子供にありがちなしょうもない嫉妬か？
コイツこんな感情まで持ち合わせていたとは意外と厄介なお子様だな
「はいはい今度からそう呼ぶよ」
「た、試しに今呼んでみてよ」
乙女か！
「わかったよ、クラピカ！　これでいいか？」
「う、うん、何か恥ずかしいね……」
珍しく顔真っ赤にしやがった、これ何てクラピカ君ルート？　ないからそんな趣味ないから
「ついでだから俺も聞きたい事あるんだけどいいか？」
「え、な、なに？」
「街までの行き方知ってるか？」
「ごめんわからない、父さんにも街までの道順は聞いてないんだ、地図で見たら方角はわかるんだけどひたすら街まで真っ直ぐに行けばいいって物じゃないしね」
「そうか俺と同じぐらいしかわかってないのか……」
当然か、迂闊に教えて好奇心旺盛なガキが血迷って街まで行く可能性もあるからな、道中に肉食獣や魔獣に襲われたら大変だし
「街まで行きたいの？　子供だけで行くのは危ないし、自分の身を

守れるようになってからじゃないと教えられないって父さんも言ってたよ」
「わかってるって、ただ知りたかっただけだから」
「ならいいけど……」

クラピカ君は原作もそうだったが鋭い人間だ、最近はその片鱗を見せてきて簡単な嘘ならバレてしまうから注意せねばならん

「なぁクラピカ君」
「むー」

何だコイツ口膨らましてむーとか言いやがった、普段見せない変な表情に俺も鳥肌が立ってきた、男の癖に気持ち悪い事してんじゃねーよ

「な、何だよ、そのむーってのやめろ気持ち悪い」
「”君”が付いてた」
「そんな事で怒んなよ、これから気を付けるって、なぁクラピカ」
「それでいい」

ちょっと仲良くなりすぎた気がすると感じる今日この頃

に話（後書き）

クラピカの性格が……
なぜこうなった……

サン話

今現在バトってます相手１３歳俺１１歳２歳差ですがぶっちゃけ余裕
名前はモブゥ名前からしてモブキャラで覚える価値すらない
別に喧嘩じゃないよ、体術の授業の一環で組み手してるだけだし

「ちょこまか動くんじゃない！」

モブゥのすっとろい上段蹴りを伏せるように避け、そのまま足の下を抜け後ろに回る
振り向きざまの裏拳をバックステップでかわし距離をとる

「無駄無駄ぁ」
「真面目にやれ！」

真っ直ぐに俺に向かって来る、直線的で鈍臭い踏み込みに欠伸が出そう
身長はモブゥの方があるためリーチは俺よりあるがどうって事はない
打ち下ろしの拳打を半身で避け、打撃は当たらないと悟ったのかあからさまに掴みにかかってきた
掴みかかってきた右手を払いのけ、胴に手加減した前蹴りをかます、一瞬モブゥは怯むも果敢に突進、突っ込んで来る馬鹿の攻撃など容易く読めるのだよ
先程と同じように俺を掴みにかかる、右腕を伸ばし俺はそれを払をうとした際にモブゥが右手を引っ込め、左の打撃、フェイントだがバレバレなのだよ
打撃を回し受けの要領で受け流す

「貧弱貧弱ぅ！」

「クソッ！」

とうとう頭にきたのか大振りのパンチしてきた、それをしっかり目で見て伸びきった腕をかいくぐり懐に入る、顎に手加減した打ち上げの掌底を当てる
脳がいい感じに揺れ、モブゥがぐらりと倒れそうになり隙だらけの状態になった

「貴様はチェック・メイトにはまったのだッ！　死ねぃ！」

思わずテンションが上がる、がら空きのボディに渾身の力を込めた直突きをぶち込もうとした瞬間、何者かに手を掴まれた、いつの間に！

「何が死ねだ馬鹿者！」
「先生……」
「アルベル！　何度も言ってるが冷静に行動せんか！」
「充分冷静だったと思うんですが、さっきもモブゥの攻撃も全てかわしてましたし」
「そう言う事を言ってるんじゃない！　罰として腕立て１００回腹筋１００回今すぐやれ！」
「……ういっす」

確かに調子に乗りすぎたようだ反省せねば
もう同世代のガキ共には負けないぐらいになった体術のみならクラピカにも勝てる、クルタ二刀流での勝負なら負ける
これは俺の欠点だな、武器を使ったら素手と違って間合いの取り方や体の動かし方まで変わってくる、いまいちそれに順応できない、つか才能がない
体術は先生や稽古を付けてくれる大人にはまだ勝ちが遠い、最近や

っとクラピカの親父（恐らく念なし）にかすり傷ぐらい与えれるようになったけど、所詮そこまでだ
壁が高すぎる、念の前に基礎を覚えないと糞ってのは理解したが、流石に悔しい鍛錬あるのみか

罰の筋トレを終了したと思ったら先生が組み手の相手に俺を選んで抵抗虚しく、簡単にしばかれた
体のアチコチが痛いクラピカに貰った薬を塗らねば、湿布臭いけど結構効くから重宝してる
体の痛む箇所を確認していると、クラピカが近寄って来た

「やりすぎだよ」
「反省してるって、後でモブゥにも謝っとくよ」
「ハァ……」
「何だよ、ため息なんか付いて」
「何でもない……、薬塗ってあげるから服脱いで」
「自分でやるからいいって」
「いいから早く」

最近やたらお節介になってきたな、原作でもそうか微妙なダメ人間風の初期のレオリオに世話焼いてたしな
脱いでやんよ、子供でムキムキのボディを見て魅了されな

「相変わらず頑丈な体だね」
「鍛えてるからな、これぐらいクラピカ特性の塗り薬使って寝たら、明日には治ってるし」
「ふふっ、あんまり無茶しないでよ」

何嬉しそうにしてんだよ気持ち悪い奴だな

「はいもういいよ、ちょうど薬がなくりそうだし補充しとくから僕が持って帰るよ」
「ありがとう、さてもう帰るか腹減ったしな」
「うん」

こんな感じで日々を過ごしてる、脳天気と言われたらそうかも知れないが打つ手がないんだからしょうがない、来るべき日まで出来る事は少ないのだ
街までの道のりはわかった事はわかったけど、無理ってのがわかったのだ伊達にクルタ族が秘境に隠れ住んでる訳ではなかった
たった一度だけ、クラピカの親父さんに頼んで大人達と一緒に街の用事にくっついて行ったけど
道のりがあまりにも険しい、街に付くまで猛獣や魔獣に数回出くわすし、体力的にも厳しいのだ
３日間山超え谷超え歩き続けねばならん、途中に魔獣などを警戒しながら交代を挟んで休憩仮眠を取りながら街まで進む、一人では１００％無理だ街まで辿り着く前に死ぬ

クラピカが１１歳になってもう３ヶ月すぎた、恐らく旅団襲来まで一年ないだろう
その期間体力作りのみに励んでもギリギリだ、だがクラピカストーカー作戦より確率が高いかもしれない
どうする決行するべきか？　明らかに不可能なレベルだが悩むどころだ
もう時間がないな、こんな時こそ冷静になるべきだ混乱して空回りしてバッドエンド一直線はマズい

失態が多すぎる
一つは念を覚えられなかった事、これはかなりデカい念は身体能力

の底上げが出来るこれさえあれば街まで逃亡作戦が楽になっただろう
二つめは環境に慣れ、クルタ族の皆に情が移りすぎた事だ、心って
のはどうしようもない、頭では見捨てる事前提で進めてるが如何せ
ん罪悪感がかなりある、人間非情になるのは意外と難しい
実際クルタ族が皆殺しされた時それを見たらどうなるか自分でもわ
からない、想定外な事が起きる可能性もある
3つめはクラピカと予定以上に仲良くなりすぎた事だ、二つめの失
敗と似てるが意味合いが違う
ストーカー作戦の後俺とクラピカが生き残れば、クラピカは原作通
り蜘蛛抹殺に人生の大半を注ぐだろう
そんなデンジャーな奴に付いて行くつもりはないし、物語の原点【
ハンター】になるつもりもない
クルタ族同様にクラピカは見捨てる気満々だったけど、今は実際そ
うなったら見捨る事が出来るかどうかはわからない

甘いと思うかもしれない自分でもそう思ってる、だが如何せん感情
が爆発しそうな感じだ
鍛錬でもどうにもならん、精神面は人間鍛えようと思っても難しいな
まぁなるようになるか……

サン話（後書き）

次回で話しが進みます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8860z/

復讐者の仲間のような感じの人

2011年12月29日00時54分発行